

豊かな人間性を目指して

——宗教的情操の獲得——

富岡量秀

みなさん、こんにちは。今ほど一郷学長先生から紹介されました大谷大学の富岡と申します。今日は一時間ちよつとですね、お時間をいただきました。よろしくお願いいたします。

僕は先ほどご紹介をいただいたように、元々は建築をやっていました。建築と、今日お話しする内容に関わってきましたけど、仏教とくに真宗、そして幼児教育が専門です。この中には幼稚園の先生、保育園の先生を目指されている方がいらつしゃると思います。今日お話しするのは、大きなテーマで『豊かな人間性を目指して』というお題をいただいています。『豊かな人間性』というのは、みなさん今からいろいろな活躍をされると思いますが、どんな分野で必要なことです。自分自身が豊かになっていく。これは社会人経験をし

た人間から言うとは絶対に求められません。それによって自分の進む道がいろいろ開けてくる部分もあるだろうし、様々な面白いことも発見していける。そういう中で今回は『宗教的情操の獲得』という視点でお話をしようかなと思います。僕自身は幼児教育が専門で、子どもの育ちとか一人一人の生活にとっても関心がありますので、そういう視点でお話をしたいと思います。『宗教的情操』というと難しい感じがしますが、後々、「これはどういう視点で…」と僕なりの視点を提示してみたいと思います。

みなさんはずっとこちらで学ばれていて、僕も大谷大学におりますから京都光華さんとは非常に近い大学になります。仏教を大切に行っている大学なんです。みなさんはどんなイメージを持っておられるか分かりませんが、一般的に『宗教』って聞くと、こんな顔(しかめっ面)してるんですね。宗教の話、仏教の話を楽しみにしている人もいるかもしれませんが、「難しい」とか、そういうイメージがあると思います。でも本当は、みなさんがそういう話を聞いて、あるいはそういうことを考えていくと、こういう顔(笑顔)になってくるんです。ずーっと伝わってきたものなんです。ずーっと伝わって来たということには、やっぱり意味があります。そのことを大切にして生きることによって、生きる力とか、人生がより豊かになるとか、そういうことがあるから、ずーっと残ってきたわけ

豊かな人間性を目指して

です。そういうことがなかったら残ってこないはずですよ。そのへんを先輩方とか様々な人から僕らは学んで行くということがあるかと思えます。

“今日おぼえて帰ってほしい人”って書いてますけど、みなさん知っておられると思います。お釈迦さまですね。お釈迦さま知ってる人？ はい、知ってますね。こちらの光華さんは“はなまつり”をちゃんとやられてますよね。大谷大学はちよつと恥ずかしいのですが、やっていないのです。なので、うちでもちゃんとやらなきゃいけないなと思ってます。そういう意味で光華さんを見習っていきなさいなと思えます。このお釈迦さまの詳しい話は授業でいろいろ聞いていると思いますが、キャリアに関することをちよつとお話します。僕が聞いた話です。就職採用試験の時に様々な話が出ますね。質問の中にたまたま、それはお釈迦さまではなくてキリストの話だったのですが、学生さんが「キリストって本当にいたんですか？」と、ぼろつと言っちゃったんですね。キリストさんはちゃんといたので、面接の方は愕然としたわけです。「教養がない」としか言いようがないという考えです。いいですか。教養はとても大事で、知っておかないといけないことはちゃんと知っておく。そういうところを見ている人は、社会に大勢います。これからみなさんは社会に出ていかれる人が多いと思いますので、ちよつと覚えておいてください。

お釈迦さまは、ゴータマ・シッタールタと言って王子様でした、という話は聞いたことがあると思います。そして、後に「おしゃかさま」と呼ばれる人になりました。この人が伝えた教えを、仏様の教えということで「仏教」と言います。基本的なことですけどね。

もう一人挙げます。光華も大谷大学もこの人に縁があります。「しんらんさま」です。この人も実在した人で、今から七五〇年ぐらい前の人です。京都の伏見の辺りに生まれた人らしいです。名前を松若丸と言いました。のちに「しんらん」と名のりました。この人がお釈迦さまの伝えたかった本当の仏教を、「真宗Ⅱ真の宗」と言いました。仏教の一宗派の名前のように思っていますが、親鸞さまは「真(本当のこと)を宗(むね)とする」という意味で使ったと言われています。

「花まつり」の時に聞いたと思いますが、「天上天下唯我独尊」という言葉があります。お釈迦さま、そして親鸞さまが願ったこと、見つけたかったことって何なのかな。いろいろあると思いますが、僕は今日こんなことを提示してみました。

『路傍の石』って知っていますか。国語の時に読んだことがある人もいるかもしれせん。その中の主人公と学校の先生のやりとりです。吾一という少年が出てきます。

豊かな人間性を目指して

吾一というのはね、われひとりなり、われはこの世にひとりしかいないという意味だ。(中略) たったひとりしかいない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかつたら、人間、生まれてきたかいないじゃないか。

そういう名前をめぐってのやりとりがあるわけです。さあ、みなさん、どうでしょうか。みなさんは今大学生ですが、ここまで生きて、さらにこれから長い自分の人生を、本当に大切なものとして生きていく“ということを願われています。あるいは、そう思って生きていってほしいと願われていますが、なかなかできないですね。なかなかできないし、忘れちゃう。でも願われているのですよ、ということを仏様が伝えたかったことかなと思います。そういう視点で今回は話をしてみたいと思います。

宗教をめぐる論議はいろいろあります。いろんな人がいろんなことを言っています。学校の学びの中で聞いたことがあるかもしれませんが、日本の心理学者としてとても有名な河合隼雄という人の『宗教を知る 人間を知る』からです。

とくに日本の場合は、大きな失敗をおかしたため、それまで無視してきた(中略)

戦争中は非科学的一辺倒で来て、戦後は急に科学一辺倒。科学の知と神話の知の両方がバランスよく備わっているのはじめて健全といえるわけですが：

科学的な知り方と神話的な知り方という言葉を使っています。この両方がバランス良く備わった育ちがとても大事だということです。

ちよつと横道にそれますが、僕は幼児教育をやっているので、子どもたちに本を読むということをととても大事にしています。別に文字を覚えてほしいとか、本を読むのが好きになつてほしいとか、そういうことではなくて、その子自身の世界を豊かにしてほしい。色々な思いとか、不思議だなということとか、イマジネーションとか、その子自身の世界を豊かにしてほしい。そういう思いがあるからです。そのために絵本はあるのです。科学的な見方もとても大事ですけど、その子自身の世界を豊かにする、そういう知り方をする。その二つがとても大事です。河合隼雄という人は、

宗教がわからなければ人間を本質的に理解することはできないのではないかと考えています。

豊かな人間性を目指して

これを見なさん自身はどう思うかですね。みなさん自身はどう考えているのか。大谷の学生もそうですけど、光華の学生さんはそういうことを考えていつてほしいと思います。

日本人の宗教に対する感じ方、考え方はきわめて特殊だということです。

僕らの宗教に対する考え方、今日お話しするのは仏教ですが、特殊な感覚を持っている。「宗教はなぜ必要か」という問題提起が起こること自体がありえないということです。これは一つの視点で参考にしていただければ良いと思いますが、うちの大学にも様々な国の先生方がいます。ドイツの国の先生から教えてもらったことですが、「無宗教」と聞くとドイツ人は皮膚感覚的に「こいつ、人間か?」と思うらしいです。「こいつ、何言ってるの、人間?」ということですね。「そんなことありえない」という感覚です。みなさんが世界の多くの人々と関わっていく時には、そういう視点で見られているかもしれないと考えても良いかもしれません。グローバルスタンダードと良く言いますが、「宗教を持つ」ということはスタンダードです。これが標準・基準ですね。確かにヨーロッパとかアメリカで「若い人の教会離れ」とかありますけど、それでも宗教自身が必要ないという考え方

はないみたいです。教会に行かない、日本で言えばお寺に行かない、ということはあるかもしれないけど、宗教自体がいらないう感覚はまずありません。だから、みなさんも様々な国の人たちと友だちになってください。あるいは活躍してってください。その時に一つの大事な視点として、今言ったような話もあるということをちよつと頭の中に入れておいていただけるといいかなと思います。

そんな中で今日みなさんと一緒に考えていく視点は、“そだち”です。みなさんはずっと育つてきました。僕も育つてきました。育ちを考えていく視点はいくつかありますが、一つは“知っていく過程”です。みなさんも大きくなっていく中でいろんなことを知ってきました。多くのことを身につけてきました。だから様々なことができるでしょ。話もできるし、言葉も知っているし。多くのことを知っています。眞宗の学びは、“何かを信じ込むこと”ではありません。そうではなくて、“ほんとうに大切なこと知ること”。これが眞宗あるいは仏教が大切にできてくる学びかなと思います。何かを信じ込むような学び方ではなくて、本当に大切なことは何かを知っていく。本当に豊かな人間性は何かを知っていく学びの過程かなと思います。そうになると“知り方”が問題になってきます。

絵本を見てみます。「かけがえのない、大切な一人ひとりの誕生：」これは赤ちゃんで

豊かな人間性を目指して

す。僕はこの人の絵本が好きで、特に絵が好きなのです。実際の絵本は開くと赤ちゃんを抱っこした大きさになります。興味のある人はぜひ読んでみてほしいと思います。『ねえねえ もういちどききたいな わたしがうまれたよること』という絵本です。とても良い絵本だと思います。みんなもこういう赤ちゃんとして生まれてきたわけです。みなさんもそうですね。ここにいらっしやる先生方もそうですね。おうちの人たち、家族もみんな赤ちゃんとして生まれてきました。みなさんは、赤ちゃんが生まれてくるということを、生物学的なこと、科学的なこととして知っていると思います。じゃあ、それが「すごいね!」「不思議だね!」という知り方になっているかどうかです。一人の人が生まれてくることは、「すごいね!」「不思議だね!」。自分を含めてね。友だち、お隣の人、「すごいね!」「不思議だね!」って言えるような友だち関係として、相手のことを思っているかどうかです。そういう知り方になっているかどうかです。ちょっと考えてみてほしいと思います。

これからお話しすること、絵本を見せる場面は、みなさんの「知っている」ことです。これは『せかいのひとびと』という絵本です。ちょっと周りを見回しながら考えてみましょう。「からだの かたちからして ちがうでしょ。」どうですか。お隣の人と体の形は一

緒ですか。「大きい人 小さい人 中ぐらいの人」いっぱいいますね。全員違います。「だ
けど 生まれた時 小さいのは みんな 同じ」さつき見せた、生まれた時はみんな赤ち
やんです。一緒ですね。そうなのに「人間は 身分とか 地位とか かい級なんていう
おかしな しくみを つくってきた…」それも知っていますね。その中にみんなは生きて
いるわけです。「でも みんな 同じ地球で くらしているんだし」この中で地球以外に
住んでいる人いませんね。いたら手を挙げてね。サインもらいに行きますから。「同じ空
気を すって 同じ太陽に てらされているんだ。」これも一緒ですね。これも知ってい
ます。「そして さいごには だれもが 死ぬ」ということも知っています。この中で死
なないという人はいないと思います。みんな当たり前のように知っています。だけ
ど、「ある人たちは 自分と ちがっている」というだけで よその人たちを きらう。」
そういうことありますね。僕も大学で教員をしているので、だいたい一回生の時って面白
い現象が起こるんです。同じような格好、服装、髪型、しゃべり方の人たちがだいたいま
とまるんです。「私と同じ」ということがあるのかもしれないですね。でも本当は違います。
最初はくつついていくんですけど、だんだん「違うなあ」って思ったり、いろんな人との繋
がりが出てバラけていきます。だいたい一回生の時はそういう動きがあります。自分と

豊かな人間性を目指して

違う。あそこが違う。勝手に思い込んで「よその人たちを きらう。そんなことって おかしいよ。その人たちは 自分たちだって ほかの人から 見れば ちがっているって ことを わすれているんだ。」忘れていて、あるいは見えていないのか分かりませんが、知っているけど忘れちゃう、できないという現実があります。それがいろいろな問題を起こしていきます。身近なところでは友だち同士の軋轢とか、もっと大きくなっていくと戦争とかいろいろなことに繋がっていつっちゃう。忘れていてるから。あるいはできないから。みんな知っているんですよ。一人一人違うなんて、みんな知っているんですよ。もつと言うと、「二人一人大切な存在だよ」と言われたら「うん、そうです」って言うかもしれない。でも、いろいろなことを起こしている。様々な考え方、感情を持ってしまふ。そんなことっておかしいんじゃないの？という事です。それを「悲しいね」「不思議だね」と言っているのが仏教です。「悲しいなあ」と教えてくれているのです。

これは『いのちのまつり』という絵本です。もしかしたら小学校の道徳で読んだことがある人がいるかもしれません。「どこまで関係づけてきますか。」ちよつと読んでみますと、「ぼくにいのちをくれた人 2人」お父さんとお母さんです。どんな人でも生まれてきたからにはお父さんとお母さんが必ずいます。「お父さんとお母さんにいのちをくれた

人 4人」これはおじいちゃんとおばあちゃんです。「おじいちゃんとおばあちゃんにいのちをくれた人 8人」ずーっと計算してみてください。どうですか。「ひいおじいちゃん」とひいおばあちゃんにいのちをくれた人 16人」そうですね。どこまで自分と関わりがあるんでしょうか。「自分を支えてくれているいのち」と書いていますが、ずーっと繋がっていくわけです。もしも、この絵の一番上のちっちゃい人が「僕はこの人とパートナーになりたくないなあ」とか、女性の方が「この人とはパートナーになりたくないなあ」とか、あるいは途中で不幸があつて亡くなつちやつたりするかもしれない。そんなことは当然有り得るわけです。だって日常的に起こっているでしょ。そうしたらこの子が生まれてくる可能性はほぼゼロです。みんな改めて見た時に、ずーっと繋がっている。どこかで「この人とはパートナーになりたくない」と思っただけで、自分がここにいる可能性はほぼゼロです。ものすごい確率というか偶然が重なっています。生まれるというプロセスは生物学的に知っています。こういう知り方もあるわけです。たまたまの繋がりがずーっと繋がってきて、偶然がずーっと重なってきて、ちよつとでも「嫌だ」という感情が起こつただけで、何かちよつとアクシデントが起こつただけで、みなさんがここにいる可能性はゼロです。すごいことが起こっているんですね。それを純粋に「すごいね」「不思議だ

豊かな人間性を目指して

ね！」と思えるかどうかです。

今、二つの知り方を提示しました。科学的な知り方、もう一つは色々なことが重なってここにいるということ、「すごいね！」「不思議だね！」というような知り方です。

問題提起です。小さい子よりもみなさんの方がいろいろ知っていますよね。どうですか。知っていてもわからないと困ります。だって経験しているでしょ。様々な難しいことも勉強しているでしょ。幼稚園、保育園の子どもたち、あるいはそれより前の子どもたちより知っている。では本当に知っていますか。子どもの時より成長し、発達しているみなさんは、本当に子どもたちよりも、例えば「いのち」ということを考え、知っていくこと、それを伝えられますか。「いのち」ということを、幼稚園児・保育園児より長く生きていろいろなことを知っていますから伝えてください。」と言われて伝えられるかです。「いのち」ある者として大切である。隣にいる人、あるいは目の前の子どもに「本当に大事だよ」と伝えられるかどうかです。

次は僕のエピソードを紹介したいと思います。子どもの姿から「いのち」を知ることを考えてみましょう。僕は幼児教育が専門ですから、学校の授業でアオムシを育てたりとか、カブトムシを育てたりします。あるいはいろいろなものを栽培しますが、子どもたち

はカブトムシ大好きです。ところが学生に「カブトムシの幼虫を触ってごらん」って言うてもなかなか触ってくれません。ここは女の子ばかりですから、ちょっと余談ですけども、最近は女の子の方が触れるんですよ。幼教にいる子だからかもしれないですけど、女の子はキヤーキヤー言いながらも触れるんです。男の子の方が「いや、もういいです」って触れないんです。見るのも嫌みたい。どういうことと思うのですけど、そんなことが起こります。子どもたちはとっても大好きです。もう一つ代表的なのがクワガタです。かっこいいですね。男の子でも女の子でも大好きです。もう一つ大好きなものの代表。これ、なんだか知ってる？ ダンゴムシです。いろんな所にいるダンゴムシです。お母さんたちなんかは「キヤー」って言うわけです。子どもたちの質問は「なんで？」です。「なんで？」って言います。ちょっと考えてほしいと思います。子どもたちからしてみると、カブトムシも大好き。ダンゴムシも大好きなわけです。幼稚園とか保育園で大好きなダンゴムシを捕まえて帰ってくる。ビニール袋なんかに入れてね。そうなるとお母さんはパニックです。「何てことしてくれるの、先生」って。挙げ句の果てに何て言うかというところ、「可哀相だから逃がしてあげなさい」。本当に可哀相と思ってるわけじゃないのです。でも家にいるのが嫌だから、ちょっと子どもものことも考えて、「可哀相だから逃が

豊かな人間性を目指して

してあげたら?」。ところがカブトムシは家にいたりするわけです。「カブトムシはおうち
 にいて良くて何でダンゴムシはダメなの?」自分にとっては大事な友だちです。カブトム
 シは良くてダンゴムシはダメ。誰が決めているのか。大人が決めているのですね。カブト
 ムシ高いですから。ここの近くにシヨッピングセンターがありますよね。シヨッピングセ
 ンターでは結構高い値段で売っています。「お金が高いから大事なの?」「家にいい
 の?」あるいは、お父さんが一生懸命、朝早く起きて子どもたちと捕まえに行った、手間
 がかかっているから大事だとか。でも子どもたちにとつたらどつちも一緒です。どつちも
 大事なお友達です。それに対して「違う」とか「こっちは良いけどこっちはダメ」ってい
 うのは大人たちです。それを子どもたちは受け継いでいくわけです。

みなさんにちよつと考えていただけたらと思ひまして、うちの子の事例でこんなことが
 ありました。数年前です。うちの奥さんからメールが来て、「カブトムシ獲れちゃった」
 って言うんですね。その日は上のお兄ちゃんと映画を見に行く日でした。映画を見に行っ
 たらサービスでUFOキャッチャーができるコインを二枚もらえたんです。映画まで時間
 があるから「UFOキャッチャーやりたい」ってゲームセンターに行つたんです。子ども
 は目ざといから「あれがやりたい!」って言ったわけです。ふと見たら、見たことあるか

もありませんが、UFOキャッチャーの中にカブトムシが入っているんです。ぬいぐるみとかじゃなくて生き物を入れてるんだよ？ で、「UFOキャッチャーやりたい」「これほしい」で獲れちゃったんですよ。うちの奥さんUFOキャッチャー上手いからね。それも普通の日本にいるカブトムシじゃなくて、アトラスオオカブトっていうやつです。外来種です。子どもは嬉しくて帰ってきました。獲れちゃったからには育てないといけないですね、きちんと。普段、カブトムシは僕と獲りにいくわけです。幼虫から育てています。そのの世話を結構します。だけど、僕からしてみたらアトラスオオカブトの方が貴重なわけです。高いし。日本にはいないし。かっこいいし。角も三本あるしね。でも子どもはあんまり世話をしなかったんです。

みんなもこういうことを言う大人にはなってほしくないなと思うのは、「最近の子どもたちは命の感覚が薄い」とか、「最近の子どもたちはおかしい」とか。でもちよつと考えてほしいのは、大人たちがUFOキャッチャーにカブトムシを入れているんだよ。子どもが「UFOキャッチャーにカブトムシを入れてくれ」なんて言った覚えは一回もないんです。入れているのは大人です。

ちよつとカブトムシの余談ですが、カブトムシの死亡原因のNo.1って何か知ってる？

豊かな人間性を目指して

カブトムシが何で死んじゃうか。これは地域性があるんですけど、カブトムシだつてずっと動いてるわけじゃない。しんどい時だつてあるし、動かない時もある。はい、動くおもちゃには何が入っていますか。電池ですね。で、電池を探すわけ。いじってるうちにバキッとやつちゃうんです。それは、子どもたちが悪いのかな。どうでしょう。子どもたちからしてみれば、「動くおもちゃはどこで売ってるの?」と言つたら、おもちゃ売場です。おもちゃ売場の動くおもちゃには電池が入っています。だから動かなくなつたらお父さんやお母さんが電池を替えてくれる。「カブトムシはどこで手に入れるの?」シヨッピングセンター等のおもちゃ売場で手に入れる。都会ではね。東京なんか特にそうです。おもちゃ売場で手に入れたカブトムシが動かなくなつたら電池がなくなつたと考える。それをやったのは大人ですね。子どもたちが悪いのかな?という事です。

子どもたちは様々なことを見せてくれます。僕がある日、保育園に迎えに行つたら、うちの子と仲の良いしんちゃんという子がいました。「お、しんちゃん」と言つたら「あぶない!」と言つて僕のことをドーンと止めるんです。「どうしたん、しんちゃん」って言つたら「むし、ふむやんか」って本気で怒ってる。「お、ごめん、ごめん。悪かったなあ」って言つたんですけど、さあ、僕としんちゃん、どっちが「いのち」を見ているか。僕は

「命を大切にしましょう」ってこんなところで言ってるけど、虫の命なんか見てないです。ところがしんちゃん、見ているわけです。「むし、ふむやんか」って真剣に怒ってる。そんなに真剣に怒ったことある？ ないでしょ。でもみんなも実はやってたんですよ。何かとというところ、ほとんどの子どもたちがやるからです。ほとんどの子どもたちがそういう行動を起こすから、おそらく小さい時はやってたんです。

子どもの育ちからも少し見てみると、山村暮鳥という人がこんな歌を残しています。

自分は見た

遠い昔の神々の世界を

小さいおんなの子が

しきりに花に

お辞儀をしていた

こういう経験を覚えている人もいるかもしれませんが。これはどういう場面かというところ、お

豊かな人間性を目指して

花に挨拶をしているんです。お花ですよ。お花の命ですね。そういう場面は良くある場面です。例えば僕の知っている子では、アリさんに挨拶をしています。「こんにちは〇〇です。遊ぼう」として声をかけたりする場面もあります。あるいはぬいぐるみに話しかけている。そういう場面がいっぱいあります。大きくなるとワンちゃんに話しかけたりはありますけど、ワンちゃんだろうが、カブトムシだろうか、アリさんだろうが、お花だろうが、命があるわけです。そういうものを区別してないのが小さい子たちです。そう考えてみると、僕ら大人と子どもたち。子どもたちは難しいことは全然言いません。全く言わない。それこそ怒ってドーンと僕を止めたりするだけです。どっちが命のことを知ってるのかと言ったら、小さい子の方が知っているとします。僕らもそうだし、みんなもそうだったんですが、だんだん育っていく過程で忘れていっちゃうんです。それが今の育ちです。育ちの過程の中でそういうことが起こってしまいます。「悲しいね」とかそういう感覚を持っていたのに忘れてしまうことがある。それを具体的に見せてくれる存在が子どもたちです。そういう子どもたちに対して大人たちは「子どもたちが最近変わった」とか好き勝手なことを言うわけです。大谷の学生にも言いますけど、光華の学生さんたちも、どうか、子どもたち、後から生まれてきた人たちに、そういう目ではなくて、育ちのプロセ

スとか、あるいは「原因は何かな」とちゃんと考えられるような大人になってほしいと思います。これは僕からのお願いです。

この人はみなさん良く知っていると思います。アインシュタインです。舌を出している場面は有名です。二〇世紀最大の科学者と言われている人です。さっきの河合隼雄の視点の中に、科学的な知り方と神話的な知り方（神話というのは宗教的という意味です）がバランス良く備わることがとても大事ということがありました。アインシュタインはどんな見方をしていたのか。いろんな発言をしている中でこんなことを言っています。

人類にとっては、ブツダやモーゼやイエスのような人たちの功績の方が、科学を探求した人たちの業績よりもずっと大きな意味があります。

ブツダは仏教です。モーゼやイエスはキリスト教です。仏教だろうがキリスト教だろうが、いわゆる僕らが宗教と言っているもの、そういう人たちの業績の方がずっと大きいんだと。何でかと言ったら、

豊かな人間性を目指して

人類が人間としての尊厳を守り、生存を確保し、生きることの喜びを維持し続けた
いなら、これらの偉人たちがわたしたちに与えてくれたものを、全力で守り続けなけ
ればなりません。

何でこんなことを言うのでしょうか、ということに僕は考えなきゃいけないということ
です。科学者なんだから「科学が一番良い」って言うてくれたら分かりやすいのに、何で
こんなことを言うんだろう。

世の中をよくするために大切なのは、科学的知識を身につけることではなく、伝統
と理想を追求することです。

便利になってくれたらそれだけで良い。でも、この人はそうは言わないですね。そっちじ
やないよ。伝統と理想を追求することだよ、と言っています。

わたしたちには理解できないものが存在し、それが最高の知恵と美として具現して

いるということ、人間の乏しい能力をもってしては、はつきりとは知覚できないものがあるのを知っていること、—それが真の宗教心の核心です—

と言ったりもします。この人はものすごく勉強をした人です。ものすごく様々なことを知っている人です。その人が「まだまだ分からないことがある」。この人に比べたらほとんどの学者さんは何も知らないというかもしれない。それぐらい勉強しているんです。「人間の乏しい能力をもってしては」ここが大切なところだと思えます。この人はすごい人ですけど、その人であっても「人間の乏しい能力」と言っているんです。

それが真の宗教心の核心です。そういう意味では、わたしは非常に信心深い人間です。

と言うんです。この人は、信心、信じる心は人間の乏しい能力をもってして、まだまだ分からないことがいっぱいあるということをちゃんと知っている。「それが真の宗教心の核心」と言っています。これはとっても意味深いですね。何故こういうことを言うのかな？

豊かな人間性を目指して

ということですが。アインシュタインは、核・核兵器の開発に繋がった人でもありますので、複雑な、そして悲しい思いがあったと思います。「人間の問題は、科学でいろんな道具を作ったけど、それを使う知恵を持たなかったこと」ということがこの人の一番言いたかったことだと思います。

アインシュタインを巡っているいろんなエピソードがありますが、一つ紹介します。あるパーティーで、ご婦人がアインシュタインと話していて、「うちの子をあなたのようにしたいんだけど、どうしたらいいですか」とって聞いたんです。アインシュタインは何て答えましたか。「物語を読ませてください」とって言ったんです。そのご婦人は、「そうか、科学者でも教養は必要だ」と、「じゃあ、物語を読ませた後どうしたら良いですか」と言ったら、「もともと物語を読ませてください」。そうしたらそのご婦人は帰ってしまいました、というエピソードがあります。アインシュタインは意地悪をしたのか。自分みたいな天才科学者は自分一人で十分。そんな秘訣なんて教えられない。だから全然科学とは関係ない「物語を読む」ということを教えてやろうと意地悪をしたのか。そうではないんです。アインシュタインの中では科学者になるということと、物語を読んでイマジネーションを膨らませたり、自分の世界を豊かにするということに関係があると。ただ、そのご婦人はそ

のことを関係づけることができなかったんです。うちの子は小学校4年生ですけど、「小学校4年ぐらいの時にはもう中学校1年ぐらいの問題は解けました」「それぐらい数学をやった」「だから、お宅のお子さんもそろそろ高学年になるから塾か何かに行った方が良くと思います」「一日、僕は十時間ぐらい数学をやった。それぐらい僕は好きだったから」って言われたら、僕も一保護者の立場で考えてみると、「そうか」と思うんです。「うちの子を科学者にしようと思ったらやっぱり数学かな」。そう言われたら納得するんだけど、アインシュタインはそう言わなかった。物語を読む。物語的なものの知り方を知る。そういう知り方が大事だということです。それがちゃんと僕らの中で関係づけられるかということです。一人の人間としてね。そこに「豊かさ」を考えていく視点があるかなと思います。なぜアインシュタインはこのように考えたのでしょうか？ほんとうに宗教的思考と科学的思考は相反するのでしょうか？どうもこの人の中では一体になっているようです。宗教的な物の見方がいらぬとは言えない。みなさんはどう感じますか。

みなさんは、専門的な知識の獲得や解き方、専門性にはとても関心が高いわけです。それはとても大事です。専門性や知識をいろいろ身につける、キャリアを身につけるのは大事です。身につけて大きくなっていく。例えば、僕という人間がシャツを着て、ネクタイ

豊かな人間性を目指して

をして、Tシャツの時は遊びに行く感じだけど、今日はこちらでお話があるからちゃんとして、ネクタイをしています。ジャケットを着て…と、いろいろ身にまとい、「はい、専門家です」みたいなね。これも確かに大事なことです。専門性を十分に身につけていく。自分の育ちを支えるよりよい学びのために、安心・自信をもちたいとか、よりよい将来を…とか、いろいろあると思います。逆に専門性がないと不安。不安をなくしたいとか、グラグラゆるぎたくないとか、いろんな思いがあります。そのためにいろんなスキルを身につけていく。もう一つは、“人間”としての豊かさや広がりのための学びです。人間として生きていく、真の育ちの獲得+知識の獲得や解き方、専門性の獲得。この両方が必要だと思えます。専門性は、身につける・身に纏うということですが、人間自身の育ちは、この顔がね、内側からぐーっと大きくなる。その上にさらに専門性・知識を身につける。こういう育ち方がとつても大事です。両方の育ちです。その“人間”としての豊かさや広がり、その部分を担って、伝えるのが仏教だし、真宗の学びになると思えます。風船が内側からぐーっと大きくなるように、その人自身が大きくなっていく。そこで出てくるキーワードが“豊かな価値観”“真摯な態度”“広やかな心もち”です。これは知識や技術のように外側にまとうものではなくて、自分（存在）の内側から自然と湧き上がってくるように、風船

が膨らむように、大きく育まれていくものです。さつき絵本の例を出しましたが、絵本はまさにこれをやろうとしています。その子自身が大きくなるためです。その子自身の世界を豊かにするためです。アインシュタインの「物語を読ませてください」もこんなんです。いくら数学できたって、その人自身がそれをどう使うのか、それをどう発展させていくのか、いろんな繋がりを考えなければ何の意味もないんです。だから、科学的知識よりも伝統や理想を追求することが大事だということです。それが自分自身の内発的動機づけです。その人自身が面白いとか、楽しいとか、やってみたいとか、そういう意欲を育むもの、ということが言えるかなと思います。

真宗の育ちのシークエンス。シークエンスという少し難しい言葉を入れてしまいました。が、連続性、見通しという意味です。一つの視点として親鸞聖人の学び方を学ぶ。その「基礎」を育む。それが宗教的情操を育むということです。『路傍の石』ではありませんが、意義あるものとして生きていく「人」と成る基礎です。まだ言葉が上手くこなれてないまま使っているんですけど、世界を「どのようなもの」として理解するかではなくて、「どのようなようにして」理解するか。どのようにして「理解を更新し続けるか。世界あるいは社会を単に上手く利用する対象として理解する。例えば、自分の都合の良いことを実現さ

豊かな人間性を目指して

せるために使う。自分の気持ち良いように人間関係を使う。友だち関係・社会はそういうもんだ。逆にネガティブな方で言うのと、自己実現ができなくて変な方向へ行くと復讐の対象になっていたりする。社会に対して復讐するとか。それで様々な事件が起きる。そういう対象として世界を位置づけるのではなくて、世界を「どのようにして」理解していくか。豊かな理解の仕方です。その理解は一個所に留まるのではなくて、どんどん更新し続けていく。何故かというと言いつつあるように、まだまだ分からないことがいっぱいあるからです。自分に見えてないものがある。そういうものを発見し続けていく。そういう知り方、あるいはとらえ方を小さい時から育みたい。それがいづれ、視点を広げていって、豊かな人間性の中で様々なものを学んで行くことができると思います。

願われていること。「本願」と書いてありますが、親鸞さまがとても大事にした言葉です。昔の言葉なので難しいですが、後でちゃんと解説します。「仏の本願力を観ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし」。空過して（空しく過ぎて）ほしくないということが願われています。「みんな一人一人が、せっかく、ものすごいことが起きて生まれてきて、その人生を空しくないように過ごしてほしい」という願いです。そういうことを本当に考えて

いた人です。あるいはそのことがとても大事だと思い続けていた人が、このお釈迦さままであり、それを僕らに伝えてくれたのが親鸞さまという人かなと僕は捉えています。

宗教というのはさつきも言いましたように、何かを信じ込むことではありません。私(人間)“と、その生きている”世界“の事実と現実を”知る(自覚)“ことです。親鸞さまは”私“というものを、”煩惱具足の凡夫(悪人)“と言って、”世界“の事実を”火宅無常の世界“と言いました。ものすごいネガティブな言葉が並んでいます。煩惱具足の凡夫は救いようがない人です。火宅無常の世界というのは常に様々な出来事が移り変わっていて、楽しいことばかりは続かない世界です。そう捉えた親鸞さまは、もう諦めて「世界なんてこんなもんだよ」とひねくれて、やけっぱちになって生きていったかと言ったらそんなことないんです。だからこそ、大切に生きようと思った人です。だからこそ、しっかり生きていこうと思った人です。本当に”知っていく“というのはそういう方向に行くんだらうなと思います。親鸞さまは本当に人間をずっと見つめて、あるいは世界をずっと見つめて、こんな言葉を言った。絶望的な感じがするけど、「だからこそ、みんなにも空しく生きてほしくない」と願われている人です。僕もそう願われている存在、だからしっかり生きていこう。“世界”を絶望の対象として捉えるのではなくて、“だからこそ”とい

豊かな人間性を目指して

う理解をしていった人です。「だからこそ、歩み続けよう」と、理解をし続けていった人です。そういう歩み方をしていった人と、僕は言えるかなと思います。「そういう歩みをみんなもしてね」。良いことばかりじゃないです。嫌なこといっぱいあるし、本当に悲しくて、悲しくて、辛いこともいっぱいある。おそらくこれからみんなにも起こってきます。だからこそ、しっかりと生きていってほしい。そういう時に絶望するんじゃないくて、しっかりと生きていってほしい。「ちゃんと歩むべき道が見つかるはずだ」と言い続けた人です。

真宗の保育は他の実践保育と何が違うのか。「生きる力」は国も言っています。でも、この中には専門の方もいらっしやるかもしれませんが、「生きる力」ってものすごくぼやっとしてるんですよ。何故かと言うと、生きる力に必要なスキル、コミュニケーション能力、何かを使う能力、いろいろあります。じゃあ、それを身につけたからと言って、この世界を素晴らしいものとして生き抜いていける保証は誰もしてくれない、と言うか、そこは不確かです。コミュニケーション能力とか、大事ですよ。いろんな能力ってとってても大事なんです。だけど、それを身につけたからと言って、世界を、社会を生き抜いて行けますという保証は誰もしてくれません。保証できません。生きる力の中身はぼんやりしてる

んです。最近の教育の研究者で知っている人はかなり多いですけどね。難しいわけです。真宗で言っている「育ち」は、僕の言葉で言うところには「生かされてある力」です。いろんなものの関わりの中で生きる。それはある意味「事実を知る」ということです。事実を事実として、きっちりと向き合って知っていく力が身についたら良いだろうと思います。そうしたら、そこから大切な何かが見えてくる。そういうことを教えてくれているんだろうと思います。なので、僕は「生かされてある力」の獲得が、「人生に向き合う力」と言えると思います。

真宗は最初の方に言ったように、宗派名ではなくて「真」は「本当の」という意味です。「宗」は大切にすること、大切にすべきことですから、「本当に大切なことを見つめ続ける学び」と定義づけてもいいかなと思います。だからこそ、どのように理解し続けるか、ということになります。学び続けるから理解し続ける。そういうことが言われているのかなと思います。こういう願いに出会う時に、大人と子どもが一緒に歩いていこうという世界が見えてくるはずです。親鸞さまは自分の思想をまとめた本の中でこんなことを言っています。難しい言葉ですが、「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え」これは単純に言っちゃうと、「先に生まれた大人は、小さい子どもたちを導いてあげてね」

豊かな人間性を目指して

ということですよ。「後に生まれた子どもたちは、先に生まれている大人たちを十分信頼して訪ねてください」ということです。みなさんは今まだ学生さんでその途中過程にありません。だから、そういう大人たちを訪ねて行ってください。そういう人を見つけてほしいと思います。で、みなさん自身が今度は子どもたちから訪ねられる人になってほしいと思います。光華さんであれ、大谷さんであれ、そういう「学び」と「育ち」が願われているんだろうと思います。そういう人になってほしいという願いが込められています。何でかと言ったら、「無辺の生死海を尽くさんがため」です。「無辺の生死海」はこの現実世界です。この現実世界にはいろんな厳しいことがある。「尽くしていく」というのはちゃんと生きていくということです。みなさん方はこれからいろんなことに出会います。これは保証します。例外なくいろんなことに出会っていきます。そういう中でちゃんと歩み続けて行ってほしです。そのために必要なことを大学ではいろいろ教えてくれると思いますが、それをちゃんと学んでほしいと思います。

“宗教的情操”って何なの？ということを僕なりに定義してみたいと思います。宗教的情操ってというと漠然としているんですが、僕は単純な言葉に言い換えたいと思います。現在に、未来に生きるものを組み込むためのデザイン“です。じゃあ、真宗の学びでは

何をデザインするのか。三つ言葉を挙げています。“不思議さ”、“関係づけ”、“敬虔感情”です。“不思議さ”は、みんなもそうですけど、小さい時の育ちのプロセスを考えると、様々な不思議なことに会って来たんです。最初に触れることはみんな不思議ですからね。いっぱいいろいろな不思議に会ってきて、だんだんそれが不思議じゃなくなっていくわけです。当たり前のことになっていきます。でも、世の中にはまだまだ分からないことがたくさんあるはずですよ。これから見つけ続けていけるはずですよ。見つけ続けてください。絶対に見つかるはずですよ。“関係づけ”というのは、さっき絵本を見せましたけど、様々なことは関わり合って成り立っています。だから、いっぱい関係づけてください。これは参考になるかどうか分かりませんが、この中に iPhone を使っている人がいると思います。Apple のステイプ・ジョブズ。この中に iPhone や iPad などを使っている人いるでしょ？ それを作った人です。ステイプ・ジョブズは最初大学に行った時に、確か途中で断念するんですね。「面白くない」って大学を辞めるんです。その時に何もすることがないから大学でも行くようになって Calligraphy の授業を受けたんです。それは非常に美しい字体、昔のきれいな字体の授業だったんです。それがとっても面白かったです。ビジネスとは全く関係がない字の美しさ。でもその学びが、世界で一番美しいと言われる

豊かな人間性を目指して

Macのフォントに繋がっていったという話を聞いたことがあります。一件、全く関係ないようなことが実は繋がっている。それが繋がられるかどうかは自分次第だと思います。そこが豊かさです。様々なことが関係し合っていて、関係づけることによって新しいことが見えてきたりします。自分の思い込みで関係づけていくんじゃないやなくて、もっと広い視点で、様々な分からないことに繋げていく。そういうことができると思います。例えば、さつき紹介したアインシュタインのエピソードです。「物語を読む」ことと「科学者になる」ことを関係づけられなかったのはご婦人です。でもアインシュタインは関係づけています。そこで豊かなものを見つけた。あるいは新たな発見をしていった。だから、自分の中でそういうものを否定するんじゃないやなくて、実は無数に関わり合っている。そういう視点を与えてくれるのが仏教なのかなと思います。「敬虔感情」は、まさに敬うということです。聞いたことがあるかもしれませんが、日本には良い言葉があります。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」。物を知って、知識が豊かになって、分かってくるまで、「オレは知ってるぞ」「オレはお前より偉いんだ」とふんぞり返るんじゃないやなくて、頭を垂れる。まだまだ分からないことがあるし、さらに、知っていくと様々な大切なものが見えてくる。だから頭が下がってくるということです。それが「敬虔感情」です。そういう育ち方かなと思います。

“不思議さ”は“広やかな心もち”に繋がっていくし、“関係づけ”は“豊かな価値観”に繋がっていく。そして“敬虔感情”は“真摯な態度”に繋がります。

僕の専門から行くと、“広やかな心もち”“豊かな価値観”“真摯な態度”は、文科省が「身につけていくべきこと」と言っていることです。じゃあ、それをどうやって作るのか。どうやって育てるのかと言って、僕はこの三つのキーワードを出しています。真宗の学びが育むもの。“不思議さ”は「自分を取り巻く様々な環境・事物・事象に“不思議さ”を発見する眼を身につけること。そして、いずれ“自分”の“不思議さ”に気づいていくこと」です。それが仏教の専門的な言葉で言う、“自覚”に繋がっていくのかなと何となく僕は思ったりもします。“関係づけ”は、「あらゆる環境・事物・事象が関係しあっていることを知っていく。そして“自分”も“関係”の中にあることに気づいていく力を培うこと」です。仏教の専門用語では“縁起”に繋がっていくのかなと思ったりします。この辺りは専門の先生にいろいろ教えていただきたいと思いますが、そういうところに繋がっていく。いきなりそんなことを言っても繋がっていきませんが、いろいろ関係づけるということを通して、そこへ繋がっていきけるかなと思います。“敬虔感情”は、「さまざまなことを知っていくことは、じつは“わからない”ことがあるという知り方であることを身に

豊かな人間性を目指して

つける。それは「不思議さ」に対する、さらに豊かな感覚を育む」ということです。頭が下がるということで、仏教でいう「帰命」だと思えます。いずれね、そういうところに繋がっていくんだらうと思います。それが、いわゆる「宗教的情操を育む」ということかなと思います。

僕の専門は教育なので、教育学者のジョン・デューイという人の話を紹介したいと思えます。ジョン・デューイは実はみなさんにも関係が深いんです。デューイは宗教を否定したんじゃないかと言われていますが、実はそんなことはありません。「形骸化し、きちんと機能しない宗教を否定した」んです。具体的に言うところ教会です。「ちゃんと宗教的情操を育まないんだったら意味がない」「だから、それはいらぬ」と言います。「でも、宗教的情操はとても大事」ということが赤字で書いてあります。

多くの人々は、今日、宗教として存在しているものの知的内容や道徳的内情を見て、強い嫌悪と反発を感じる。そして、その結果として、これ等の人々は、自分自身の中にあるものをも見落としている。

「宗教なんて」って言っている人は自分の中にあるものも見落としている。

それが実を結べば、純粹に宗教的なものになる様なもの（そこへ繋がっていくようなもの）、そういう態度が自分の中に潜んでいることに、気づいてすらいらない。

無宗教とか言ってる人はそういうものを完全に見落としているということです。

宗教というのは、本来、人間経験の、部分的な移り変り易い出来事に、全体的な見透しを与える力がある。

それが宗教的なものの見方だと言っています。それがいわゆる教育として育むものです。

人間と環境との、自然的な交渉がより多くの知性を育み、より深き知識を生むことを確信している。そして更に深く、世界の不思議の中に突き進んでいくことを前提条件とする。

豊かな人間性を目指して

僕が「不思議」というキーワードを出したのはここを参考に使っています。世の中にはいっぱい不思議なことがある。オカルト的な不思議ではないですよ。本当に一般的にあるような不思議です。「不思議だな」と思うことはいっぱいあるはずですよ。あるいは、「分からない」ということはいっぱいあるはずですよ。それは友だち同士の関係でも見つけられます。いろんなところにあるはずですよ。そういうものをちゃんと発見していく力。それが宗教的な特性を持ち得ると言ったのがデューイという人です。

最後に、これはみなさんにも身近なことかなと思います。「手を合わせる」。「いただきます」「ごちそうさま」です。テレビでもやってますが、あれを単に慣習としてやるという「知り方」もあると思います。元々はインドから来ているらしいですね。インドの「ナマステ」です。インドの文化的背景から言うと、右手でご飯を食べます。左手では汚い話ですがお尻を拭くんです。だから、インドの子どもの頭を左手で撫でてはいけません。怒られます。インドの文化からしたらとても大事なことですけど、僕は左利きの人もいます。しょうからどっちでも良いと思うんですけど、「きれいな」「きたない」という言葉からちょっと展開しますが、みんな経験があると思います。一生懸命頑張れる時があれば、頑張れない時もありますね。僕もそうです。一生懸命授業できる時があれば、体調が悪くて、前

の日飲み過ぎて、「今日はダメだ。頑張れない」という時もあります。あるいは友だち同士で楽しくできる時もあるし、様々なことがあって気分がのらない時があったりします。いろいろな時があります。良い時ばかりが自分じゃないと思います。出来なかったり、変な言い方ですけど悪い子の時もあります。ちゃんと授業に出れる時もあれば、出来ない時もあります。おしゃべりしちゃう時もあるれば、しない時もあります。いろいろありますが、でもその両方を合わせて「自分」です。両方を合わせて大切な「本当の自分」です。お友達同士も大事です。ご飯が一番分かりやすいのは、そういう自分でもちゃんと支えてくれている。命を捧げてくれている。そういうことに気がついていく「知り方」もあるかなと思います。

ちよつとザクツとした内容になってしまいましたが、僕らは、仏教という長い歴史の中で、「二人一人が願われている存在だから大切に生きてね」ということを、ずっと伝えられてきているんだということをお話させていただきました。今日はこれで終わらせていただきます。ありがとうございます。

——二〇一四年一〇月三一日——